虹の架橋は足利屋・さくらもーるアスクが毎月１日発行する地域新聞です。

虹の架橋

第３２６号
令和４年10月１日発行
企画・編集　松﨑　靖
発行　㈱足利屋洋品店
みどり市大間々町4-1380（〒376-0101）
TEL 0277－73－1212
Fax 0277－70－1066

今月の題字
山口　望さん
（埼玉県川口市）
大間々町浅原出身の（旧姓山同）望さんは18歳で地元を離れて都会で暮らし、今では２児のお母さんです。自然豊かで人の心も温かい大間々が大好きだそうです。

待望の『田楽座ながめ公演』上州八木節保存会も特別出演

今から五十六年前、信州伊那に誕生した田楽座は、日本各地の祭りで受け継がれてきた太鼓・唄・踊り・獅子舞などの民俗芸能をもとに創作舞台を繰り広げる「まつり芸能集団」です。「健康で明るく、底抜けに楽しい！」をモットーに人と人との心を繋ぐ舞台をお届けしています。中心メンバーのひとり「いっちゃん」こと相楽逸枝さんは大間々出身の笑顔の素敵な女性です。新型コロナウイルスの影響で何度も延期を繰返し、ようやく実現の日を迎えます。

田楽座の公演の舞台として「ながめ余興場」は、これ以上ない最高の檜舞台。『そうだ、忘れかけた日本に会いに行こう』という合言葉は、田楽座とながめ余興場のためにあるような言葉です。

今回の公演には、六十八年前の発足当時から、正調八木節の保存、維持、普及を目指して活動を続けている、「上州八木節保存会」のメンバーも特別出演の予定ですのでいっそう楽しみが増しそうです。前売券は足利屋でもご用意しています。

～『田楽座ながめ公演』～
開催日　10月2日（日）
午後1時半開演（午後1時開場）
前売　一般3,000円　一般ペア5,000円
小中学生・障がい者　1,500円
U-25（16～25歳）　2,000円
＊当日各500円増・未就学児無料

小耳にはさんだ いい話 《326》

（文責・靖）

「つながり」の中で生きる

毎月、友人から「ニューモラル」という冊子をもらって読んでいます。モラロジー道徳教育財団が発行するこの冊子は昭和四十四年九月創刊以来、心豊かな人生、楽しい家庭、明るい職場、住みよい社会をつくるための心遣いと行いのあり方を提唱しています。

九月号の「つながりの中で生きる」という話にも共感しました。

情報通信技術が発達した今、私たちは世界各地で起こっている出来事について、即座に情報を得ることができるようになりました。その反面、都市部では、自分の家の隣にどんな人が住んでいるか知らないということもあります。「ご近所同士の助けあい」がなくても日々の暮らしが成り立つほど便利な世の中になったということかもしれません。便利な生活に慣れてくると、他人と関係を結ばなくても自分一人で生きて行けると錯覚してしまいそうですが、便利で快適な生活を送ることができるのも、さまざまなサービスを支えてくれている人たちの働きがあるからで、「お世話になっている」という意識があるかないかに関わらず、私たちは多くの人たちとの「つながり」に支えられて今を生きています。

私たちは身近な人や社会との「横のつながり」の中で、「世の中の支え合い」に参画することができます。一人ひとりが社会の一員としての務めを果たすことで、社会の機能は保たれ、発展していくのです。さらに、過去から未来にわたって続いていく「縦のつながり」の中で、「次の世代の人たちがより幸せになるように」という先人の思いを受け継ぎ、子孫たちの幸せを願って社会の維持・発展に努めることも祖先の世代の恩恵に報いることにはないでしょうか。

自分自身を支えてくれている縦と横のさまざまな「つながり」を再認識し、これらの「つながり」をさらに豊かに育みながら、一人ひとりの「心豊かな人生」と「住みよい社会」を築いていきたいものです。

「ニューモラル」の本の中に「先人木を植え、後人その下（もと）に憩（いこう）」という言葉がありました。私たちの今の幸せな生活は先人のお陰だと思います。

世界一小さな足利屋トイレ美術館

今月の絵手紙《326》吉政英笑さん『秋桜』

静岡県浜松市の吉政英笑（よしまさはなえ）さんから毎月季節感溢れる絵手紙が届きます。九月に届いた絵手紙には、紅白のコスモスの絵に「秋桜の微笑 裏顔の美しさ見～つけた」いう言葉が添えられていました。花の裏顔の美しさに惹かれた吉政さんの感性が素敵だと思いました。私たちはつい、表面的なものだけを見て、裏の部分、見えない部分には気づかないことがあります。吉政さんの絵手紙を見ているうちに、表面の美しさは裏の見えないところの支えによって生かされていることに気づかされました。

靖（やっ）ちゃん日記

令和四年九月十日（土）

三年ぶりに、ながめ余興場で開催の「おわら風の盆」。朝九時集合。前、黒子頭の松島弘平君が作った風の盆の舞台背景。八尾諏訪町の風景を組み立てた。舞台に赤や青や緑のスポットライトを当てると風の盆の衿並みが浮かび上がった。

「開会寺風の盆満中」の庵代表が運転するマイクロバスは、朝七時に富山を出発、午後一時前に余興場に着いた。三年ぶりに庵ご夫妻と再会できて嬉しかった。

開演一時間前から余興場の周りは長蛇の列。そして開演。三味線と胡弓とおわら節の唄が始まり、花道と桟敷席から女踊り、男踊りが入場。舞台の幕が開くと、八尾の衿並みが浮かび上がり鳥肌が立った。終演後には出演者全員が外に出て、「見送りおわら」を披露。十五夜の満月の下での「ながめ風の盆」は大感動だった。

編笠を深くかぶった女踊りの人達は月明りの下で四十歳は若く見えた。本当の年は知らない。

秋彼岸姉の歩幅に合わせ行く

九月二十三日は父・福司の二十三回忌。その十日前に私たち姉弟四人と嫁や子供たち七人で菩提寺で法要をして、お寺の一番上にあるお墓にお参りをしました。全員が昭和二十年代生まれの姉弟四人が揃って墓参りができるのもご先祖様のお陰だと思います。最近、足腰が弱くなった次姉にとっては石段を上ることが大変そうに見えましたが、上の姉も弟も次姉の歩幅に合わせてゆっくりと歩いて行きました。

子供の頃、姉たちに連れられて、渡良瀬川や早川に遊びに行った頃を懷かしく思い出しました。

虹の架橋 ⇑ 検索 で、インターネットからでもご覧いただけます。

第三百二十六号は令和四年十一月一日（火）発行予定です。

❤やっちゃんの似顔絵提供：ひさかさん